

2021 年度「神戸女学院の 100 冊」書評コンテスト 講評

「神戸女学院の 100 冊」は、神戸女学院大学の全教員が専門分野の学びの基礎となる書籍を選び、編み上げたものです。3 学部 5 学科の、人文科学、社会科学、自然科学から芸術にわたる 19 分野の 95 冊、そして、院長推薦の 5 冊の計 100 冊は、本学でリベラルアーツを学ぶ大学生の道標となり、新たな世界への扉を開いてくれる珠玉の書ばかりです。

今年度、2021 年度は、全学より 6 名の応募がありました。6 名とも大変熱のこもった書評を書いていただきましたが、各分野の先生方に慎重にご審査いただき、結果、1 名の学生さんが最優秀賞、1 名の学生さんが優秀賞、2 名の学生さんが佳作に選出されました。

最優秀賞の盛園 彩雲さん、優秀賞の濱地 萌々奈さんは、ともに、H. S. クシュナー『なぜ私だけが苦しむのか 現代のヨブ記』の書評を書かれました。この本は、ユダヤ教のラビである作者の息子アーロンがプロゲリア（早老病）という病のため 14 歳という若さで亡くなったことを受け、宗教者なおかつ苦しみに直面した人間として執筆したもので、不幸を、なぜ、と単なる苦悩として問い自己完結するのではなく、それに直面する力を自分の外に求めることを説き、それと宗教との関わりについて執筆した書籍です。出版当時、いくつかのメディアで紹介されましたのでご存じの方も多と思います。盛園さんは、視点を苦悩に直面している人からその隣人にシフトし、不幸を背負う人に対する隣人の役割、そこで大きな役割を果たしてきた儀礼も含む宗教の役割、現代社会における本学の意義にまで論を広げられ、大変良い書評を完成されました。

一方で濱地さんは、非常にこの本の流れをよく整理され、この本の視点の多様性を正しく指摘された上で、この本をそのままの形で受け入れるには解決しなければいけない論点、著者の宗教に対するスタンス、著者の旧約聖書『ヨブ記』に対する考察に異議を唱えるなど、評論としてよく書けた書評を完成されました。

佳作のお二人、藤谷 奈未さんと横山 友希さんは、どちらかというといわゆる書評を書こうとすると、ともすると「よくわかった。」、「感動した。」になってしまいがちなタイプの書籍、それぞれ生命科学の入門書と統合失調症を患われた方の闘病記をとりあげられ、ポイントを抑えた論理的な書評を完成されました。ご苦勞の多い執筆だったと思いますが、良い書評であったと思います。残念ながら 2 名の方が今回は選外となりましたが、皆さん、とても努力して書いてくださったと思っています。

今回受賞された皆さんのみならず、他の学生さんにとりましても、読書体験は文章力、考察力、問題解決能力も向上させてくれる、重要なツールだと考えます。もう少し新型コロナウイルスの大学生活への影響はあるのだらうと思いますが、そのような時期であるからこそ、「100 冊」のみならず、広く、読書体験を持っていただけることを期待します。最後になりましたが、受賞された皆さんに、改めておめでとうの言葉を贈りたいと思います。

副学長 立石 浩一